



上.2018年、パリ・ジャポニスム公演にて野村家三代で演じた『三番叟』。衣裳は美術家の杉本博司氏が手掛けた。@KOS-CREA 写真提供／国際交流基金 下.裕基さんが『三番叟』を披いたことを記念して作られた配り扇。



野村 彩也子

のむら・さやこ 1997年東京都生まれ。慶應義塾大学卒業。2020年にアナウンサーとしてTBSに入社。担当テレビ番組に「あさチャン!」「ひるおび!」「真夜中のランチ」「ゴゴスマ～GO GO!Smile!」など。10年レッスンを受けていたクラシックバレエのほか、ダンス、ボクササイズ、ヨガなどエクササイズにも余念がない。

が共通しているのかなと思っています。言い換えれば狂言がそれだけオールマイティな芸能なのかもしれない。

狂言は映像のない時代に、生身で言葉が届けるために「言葉の表情」やトーンについて細かくプログラミングしています。狂言以外

の仕事では、「狂言のノウハウを現代語でやるとこうだろう」と考えます。

彩也子…父には演出家としての視線もあるのかな。話し方だけではなく、目線や所作「観る人にどう伝えるか」という視点があります。萬斎…それは「離見の見」と言っ

父も私も「声で伝える」のが仕事です

て、世阿弥の言葉があるんだよ。客観的に自分を見ること、彩也子だったら視聴者の立場に立って、「今どう見えているか、聞こえているか」を考えるというね。

裕基には師匠が全部やって見せて、「こう見えている」というのを身体で覚えさせることを、つきつきりでやっているわけです。ただ、彩也子は職業が違うので、悪影響があったらいけないから「こうしたらどうか？」くらいに……。

裕基…私の場合は「やれ」です。小学生の頃は自分がなぜ、狂言をやっているのが分からなくて、葛藤というか「どうしてこんなに厳しく教えられなくてはいけないんだ」という気持ちになったこともありました。ただ、今になってみると、自分の身体にインストールされている狂言というプログラムに対して自覚が出てくるんですね。

同じ演目を繰り返し稽古することによって、インプットされてきたものが形になっていくんです。

萬斎…同じようなセリフでも、演

目や場面によって言い方を変えるとかね。

裕基…漠然とセリフを言うのではなく、「もしカメラが回っているとしたら、今はどアップで映されている」と思ってセリフを言え」というように指導されると、「じゃあこういうふう言おう」と、思ったりします。

彩也子…狂言を面白い、と思ったのはいつ頃なの？

裕基…面白いと言うか、嫌ではなくなったのは、2017年に『三番叟』を初演した時かな。1年かけて稽古をして、終わった後の達成感だけではなく、「自分が狂言に向き合えた」という感覚が持てた。この舞台から、変わってきたと思います。

萬斎…『三番叟』の初演の直後に、パリ・ジャポニスムでの公演。本人は大変だったと思います。父と私も一緒に、三代で演じるという画期的な企画でしたのでね。

重要なのはプログラミングされたものを血肉化し、自分のツールとして使いこなすこと。そうでな

いことだと思っています。

裕基…私はまだ修業中の身なので、これからも自分のなかにある「分らない」という部分をゼロにしていけるように努めたいです。

萬斎…改めてライブの良さを感じますね。

演者も観客も一緒になって「生きていることはいいよなあ」と共有できる。とりわけ狂言はシンプルな形で、生きていることを謳歌する表現なので、閉塞感がある時こそ、狂言の良さを社会に還元していきたいですね。

最近、よく「多様性」といわれますが、実は狂言の考え方は多様性にピッタリなんです。狂言師の発想だとコロナウイルスも「このあたりの者」でして、何かを排除するのではなく、いかに共生していくかという考え方の中心に、狂言や日本文化があるんだと思います。こうした考えを、これからも世界に発信していけたらと思いますね。



いとロボットになってしまふ。そのことが分かってくると、だんだん面白くなってきました。『三番叟』という演目が覚醒させるというのかな。私も17歳の時に『三番叟』を演じてその気になりましたから、同じことを裕基にもやらせたわけです。

裕基…『奈須与市語』は語りがメインなので、稽古では一字一句を復唱して写すように覚えていきます。最初の言葉である「そもそも」だけを3時間、稽古したこともありました。

萬斎…始まりの「そもそも」でまず、観客席の岩を斬るような太刀筋が見つからないと、スパーンと出ていけないからね。

彩也子…父と弟はやはり師弟関係なんです。祖父もですが「この人達は一生、狂言師なんだな」とつくづく思います。型が代々、受け継がれてきたのも凄いことで、尊